

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月4日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530978

研究課題名（和文） 音楽科教育における箏指導の楽曲教材開発－古典の手ほどきの調査研究を通じて－

研究課題名（英文） Teaching-materials development of the musical piece for koto instruction in music education. -From the surveillance study of introduction of traditional koto study.

研究代表者

長谷川 慎（HASEGAWA MAKOTO） 東京芸術大学・音楽学部・講師

研究者番号：00466971

研究成果の概要（和文）：箏曲実演家に対するアンケート及び聞き取り調査により、伝統的な学習ではくさくらさくら>は重要な位置づけではないことが判明した。伝統的に用いられてきた初歩の楽曲では、中間部の弦の順次進行、撥弦の方法の理解、同旋律の弾き歌いを伴うものなどが多くあった。また学校音楽の関係者を対象にアンケート及び聞き取り調査を実施した結果、箏をはじめとする和楽器の指導について困難や問題点を感じていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：According to the questionnaire and investigation to the Koto players, it was found out that “Sakura Sakura” is not important musical piece for the traditional learning. Among the music pieces for beginners those were used traditionally, there were many of “proceeding of the middle strings”, “understanding of the way of pluck the strings” and “sing and play together with the same melody”. We did the questionnaire and investigation to the persons concerned of school music, we proved that they felt difficulties and problems with teaching traditional instruments like KOTO

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：日本音楽・和楽器指導・箏曲・音楽科教育・教材開発

1. 研究開始当初の背景
 現行の学習指導要領中学校（音楽）では、和楽器の取り扱いについて「和楽器については3

学年間を通じて1種類以上用いること」としており、その代表的な楽器として箏は多く用

いられている和楽器のひとつに挙げられる。また、各教科書会社が発行している教科書にも具体的な奏法を記したページが掲載され、教材についても「さくらさくら」が取り上げられるなど、中学校の教育現場においては、箏の初歩の学習者を対象とした指導が行われている。

こうした背景には、免許法の改正により実演家を講師とした教員養成課程での和楽器実技の必修化や現職教員を対象とした和楽器講習会の開催、各種テキストの発行などにより、音楽科教員が実演家の指導ノウハウを習得し自らの音楽能力の中に和楽器の知識を得てきていることが挙げられよう。

ところで筆者は、生田流箏曲実演家として、これまで現職教員を対象とした各地の箏の実技講習の講師をつとめてきた。指導を通じて現職教員から「さくらさくら」が弾けるようになったらまたは、「さくらさくら」を弾く前の段階というその2つの指導について具体的にどのような教材を選択し、指導を行ったらよいかという問いかけが何度となくあった。

また、小学生・中学生への箏実技指導についてもゲストティーチャーという立場で教育現場において数多くの経験があるが、特に小学生への「さくらさくら」を教材として用いた指導を通じて、「さくらさくら」を弾くことができない児童に対して「達成感」を持たせるための教材の必要性を痛感していた。

2. 研究の目的

本研究は、音楽科教育における箏指導の楽曲教材について、実演家が用いている伝統的な初歩の指導プログラム（＝手ほどき）および楽曲の収集と分析を行い、箏曲の古典を基盤とした子どもの発達段階または音楽的能力に応じた和の感性を育むことができる楽曲教材の開発を行い、最初期段階での箏指導と「さくらさくら」の学習後の箏指導について新たな実践方向を具体的に提案することを目的とする。

具体的には、箏曲の公刊楽譜と関西、関東、中部といった歴史的に箏曲が発展してきた地域の実演家への調査研究、公刊されている箏指導に関するテキストの分析を通じて、現在行われている「さくらさくら」を中心とした箏指導から一歩踏み出すための教材開発を行う。

3. 研究の方法

本研究の内容は、以下の4点に集約される。

(1) 手ほどき曲の収集

ここでは、3つのエリア（関西、関東、中部）での実演家への調査を行い、実演家が

用いている古典の手ほどき曲の収集を行う。

また、昭和以降の演奏家によって作曲された手ほどき曲集についても収集と分析を行い作曲者の目的とした箏学習の学習プロセスとは何かを探る。

(2) 音楽科教育における箏指導の動向

ここでは、これまでに行われている音楽科教育での箏指導の実態について整理を行う。具体的には指導案の分析、教員へのアンケート調査・インタビューを行い、箏を用いた学習についてその実態を明らかとする。

(3) 音楽科教育における箏指導（和楽器指導）の意味

ここでは、音楽科教育における箏指導を含めた和楽器教育について歴史的に俯瞰し、和楽器教育がどのような目的で音楽科教育へ導入されたかを整理し、和楽器教育についての今後の展望を明らかとする。

(4) 楽曲の提案

上記(1)～(3)の成果に基づいて、音楽科教育における箏指導について、子どもの発達段階または音楽的能力に応じた和の感性を育むことができる楽曲教材の開発を行い、最初期段階での箏指導と「さくらさくら」の学習後の箏指導について新たな実践方向を具体的に提案する。

4. 研究成果

実演家に対してのアンケート調査は、40歳以上の実演家を対象として関西、関東、中部、北海道、山陰エリアに行った。あわせて、大阪、北海道、東京、愛知、京都、岐阜、鳥取在住の60歳から89歳の実演家に対して聞き取り調査を実施した。

調査項目は、(1)回答者のプロフィール（年齢、芸歴、流儀、稽古開始年と年齢）、(2)稽古開始当初の稽古の様子（稽古を始めた都道府県、最初期に習った曲、使っていた教則本、楽譜使用の有無）、(3)学校との関わり（平成14年改訂学習指導要領以降の子ども門弟の増減、小中学校での箏学習＜さくらさくら＞の学習前後に教えた曲）であり、アンケートは639名（内30歳代以下14名）の回答を得た。

アンケート調査の回答者は10代から90代まで幅広い世代の回答があった。流儀の内訳は生田流が614名と多数を占め山田流は16名あった。年代別の内訳は40歳代が117名、50歳代が140名、60歳代が207名、70歳代が113名、80歳代が21名、90歳代が2名であった。

戦前と戦後すぐに箏学習を始め実演家の多くが「楽譜を用いない稽古」をしており、現在とは大きく異なり楽譜を用いない口伝が中心であったことが明らかとなった。また、学

習者の多くは師匠の芸筋が発行している教則本を用いていたことも判明した。そうした教則本が刊行された時期の多くは昭和の初めであり、多くの学習者が伝統的な楽曲の他大正昭和に新しく作られた手ほどき曲で学習していることがわかった。また、<さくらさくら>を手ほどきに用いていたのは240名おり、年代を二分してみたところ昭和29年以前に学習を始めた実演家が56人、昭和30年代以降が141人と昭和の始め頃はあまり手ほどきとして用いられていないことがわかった。この傾向は昭和30年代以降あたらしく刊行された教則本に<さくらさくら>が用いられていることが大きく影響していると考えられる。

はじめに習った曲として<ロバサン>（宮城道雄作曲）、<虫づくし>（古典）、<さくらさくら>、<四季の花>（古典）の4曲をアンケートに提示したが、その他の回答として<虫づくし>のように「平調子を覚えるための曲」として数名の回答者が曲名不明の歌詞をあげていたことから、調子を覚えさせるための師匠の工夫がされていたことが伺われる。

次にはじめに使っていた教則本については、宮城道雄による『宮城道雄箏小曲集』が圧倒的に多く300名の回答があった。

次に小学校で<さくらさくら>を学習する前の曲としてあげられた曲は童謡や唱歌178名あり、中でも<チューリップ><数え唄>を挙げた回答者が多く見られた。その他、子どもが知っている古典、アニメソング、宮城道雄小曲集、運指や調子の理解のしやすいものがあつた。学習後の曲としては、<荒城の月>、<うさぎ>、<数え唄>、<夕やけ小やけ>などの唱歌や童謡を挙げた回答者が多く見られた一方で、<三段の調>（久本玄智、昭和18年作曲）を挙げている回答者も広い地域で見られた。

中学校で<さくらさくら>を学習する前の曲としてあげられた曲は、<チューリップ>、<数え唄>、<うさぎ>、<荒城の月>、<ロバサン>、<夕やけ小やけ>、<三段の調>を挙げた回答者が多く見られた。その他にも童謡や唱歌と答えた学習者もあつた。学習後の曲としては、<六段の調>64名、<荒城の月>45名、<三段の調>26名のほか、アニメやポピュラー36名、<数え唄>5名などがみられた。この他にも<千鳥の曲><松づくし>などの古典も見られた。カテゴリー別に見ると新曲が106名、古典が80名、唱歌や童謡が78名であつた。

この結果をふまえ、<さくらさくら>の学習前には①平調子の理解をするための調子調べである<虫づくし>や、13弦に歌詞を当てはめ歌いながら平調子の音階を学べる活動

をとり入れる、②運指について跳躍進行が少ない<姫松小松><ロバサン><数え唄>といった歌を伴うものを発達段階に応じて選択しとりあげ、<さくらさくら>の学習後には③演奏をより楽しむことができるやや難易度の高い古典<六段の調>や古典を取り入れた新曲<三段の調>、調弦を変えて演奏する<荒城の月>など発展的な学習ができる曲を取り上げて箏の音楽を楽しむ、いわば段階を持った学習を展開してはどうかと考えた。

次に、学校音楽の関係者を対象に調査研究を実施した結果、箏をはじめとする和楽器の指導について、以下の点に特に困難や問題点を感じていることが明らかになった。以下に、特徴的な内容ごとに代表的な意見を引用しながら総括する。

(1) 教師自身の経験や知識・技能等の不足

何と言っても、最大の問題は、教師自身に経験や知識・技能が不足していて、「何をしたらいいのかわからない」ということである。「大学で箏には触れたが他の楽器はない」「自分自身に十分な経験がなく、生徒に達成感や成就感をもたせられるかがとても不安である」などは、多くの音楽教師の偽らざる気持ちである。

(2) 楽器・予算等の不足

「楽器の手配、準備に関しても困っている」という意見も多く寄せられた。地域の教育委員会等から順番で借りてきているところ、地域に呼び掛けて楽器を集めている学校など工夫は見られるが、十分に学習の環境が整えられているとは言い難い。さらに、楽器が準備されても、それをどう調整し、取り扱ってよいかわからない教師が多い。

(3) 指導の硬直化・発展性のなさ

少しぐらいの和楽器体験があつても、多様な指導法を身に付けている教師はきわめて少数である。「とにかく本やDVDを買いあさってそこで得た物だけで指導していることが多く、いつも「これでいいのだろうか」と疑問や不安に思う」「箏の授業をしているものの、指導がパターン化してしまつて発展しない」などの声が聞かれた。わかりやすい指導法の開発も焦眉の課題である。

(4) 教科書の問題性

「さくら」を取り上げるのはよいが、ただ導入教材として取り上げるだけで、教材のもつ本当の価値に触れるような掲載の仕方がされていないという意見があつた。あまりに楽曲体験、楽器体験が先走り、かえって日本の音楽が子どもたちにとって魅力

ないものになっているのではないかとの危惧である。

(5) 教師教育のあり方

「大学時代で触れた伝統楽器が箏だけなので、笛がなかなか取り組めない。現校は箏も5面しかなく、生徒にいきわたらず、練習がはかどらない」「大学で少し学んだ程度なので指導をするには経験がなさ過ぎる。独学で勉強して指導するには専門的過ぎるので実際に経験をつまないと難しい。プライベートで習いに行っていたが時間や金銭的にも厳しい」という意見からも、教員養成における和楽器の実技指導の不十分さは明らかである。ただし、大学の諸事情を鑑みると、これを直ちに一新することは難しいと言わざるを得ない。むしろ、地域が支援をして、教師教育全体の中で和楽器をどう経験させ、指導法を身に付けさせるのかを考えるべきではないか。

○おわりに

教材開発に限らず、学校音楽科教育における日本音楽の指導については、研究者及び教師も手探りの状態であるといえよう。本調査で行ったように、今後も実演家の経験を生かした教材、指導法の開発を行うことが日本音楽の持つ幅広い魅力を子ども達に伝えていくことにつながるのではないかと考えている。

今回行った全国の実演家の手ほどきに関するアンケート調査は、北海道、大阪、愛知、鳥取、島根と現地の三曲協会、三曲連盟等の実演家の協力と理解により調査ができた。これは、実演家においても学校教育における和楽器指導、日本音楽指導の現状をなんとかしたいという熱い思いの現れである。惜しめない協力で感謝申し上げます次第である。

また、直接聞き取り調査にご協力いただいた実演家の方々からは昭和初期／戦前のお稽古の様子を伺うことができ、これまで限られた芸談等でしか知ることができなかった事実を明らかとすることができた。こちらも惜しめない協力で感謝申し上げます次第である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 慎 (HASEGAWA MAKOTO)
東京芸術大学・音楽学部・講師
研究者番号：00466971

(2) 研究分担者

佐野 靖 (SANO YASISHI)
東京芸術大学・音楽学部・教授
研究者番号：80187278